

近代日本建設の偉大な功労者

L・L・ジェーンズ



画期的な教育法

学校中が大変な騒ぎになった。なにしろ、女生徒が入学してくるといふのである。

「女子と一緒に勉強なんて、聞いたこともない。恥だよ。いくらジェーンズ先生の決定だって、従う訳にはいかないな。」

生徒達は口々に不平を言い始めた。

「先生、女子と机を並べる事は、わが国古来の道徳に反します。従えませぬ。」

ジェーンズは彼らの意見を黙って聴いていたが、やがて静かに口を開いた。

「それなら尋ねるが、君達のお母さんは男かね、女かね?……女だろう。」

君の今日あるのは、お母さんのお陰なのだ。まさか、そのお母さんを軽蔑する訳にはいかないだろう。女性は今後、母親になる。十分な教育を受けるのは当然だし、差別すべきでもない。違つかね?」

反論の余地もない。生徒達は納得せざるを得なかった。牛肉と牛乳とパンの食事、すべて英語で行われる授業……何もかもが目新しい洋学校のルール。またひとつ、新しい項目が追加された。

「女子ノ入学ヲ認ム」

わが国初の男女共学は、こうして始まったのである。

レロイ・ランシング・ジェーンズ。一八三八年、アメリカ・オハイオ州ニューファイアデルフィア生まれ。一八歳でウェストポイントの陸軍士官学校に入学。卒業と同時に南北戦争が勃発した。北軍士官としてリンカーンの下で活躍したが、戦後まもなく退官、農耕生活を始める。平和な世には軍隊など無用の長物でしかないと考えたのである。

ちょうどその頃、日本は維新の嵐の真只中であつた。揺れ動く時代の中で熊本藩では横井小楠の影響の強い実学党派が中心となり、数々の革新的な政策を実行に移し始めていた。新しい時代を切り拓くには、どうしても西洋式の教育を受けた優秀な人材が必要だ。こうして、熊本洋学校の開設が決定した。外人教師の人選については、長崎在住の英語教師、フルベッキに委ね

られた。彼はアメリカの教会を通じて知った、ジェーンズを推薦。こうして、ジェーンズは教育者として海を渡る事になった。一八七〇(明治三)年、三十二歳の時である。

彼の着任が決定すると、熊本では初の洋館の新築を始めた。技術者も資材も地元では揃わず、わざわざ長崎から求めた。窓にはめ込まれたガラスが珍しく、「ビードロ館」と呼ばれて、日に千人以上の見物人が集まったという。こうして、一八七二(明治四年)九月、熊本洋学校は産声を上げた。生徒数は四十六人、農工商の子弟を含む四、五百人の中から選ばれた、優秀な青年達である。ジェーンズはまず、九つの学科を設け、修業年限をアメリカ風に四年と定めた。そして、授業はもちろん

食事から寄宿舎での生活に至るまでの一切を、一人で担当・指導する事にした。時間の厳守、禁酒禁煙の励行などその内容は極めて厳しく、徹底したものであったという。

こうして、日本語をまったく理解できない先生と、英語を二語も知らない生徒との奇妙な授業が始まった。教科書も英語で書かれていたため、生徒達は初め本の上下さえもわからないという有様だった。アルファベット二十六文字を習得させるだけで、二十日間が費やされた。何もかもが手さぐりの連続。しかし、ジェーンズの教育法は、知識を詰め込むという種類のものではなかった。基礎的な段階が終了すると、彼は自発的な学習を促し始めた。生徒自らが考え、学ぶよう導いたのである。互いに教え合ったり、一人で熱心に自習したりする若者達の姿が、校内の至る所で見られた。こうして、ジェーンズすら感嘆させる程、生徒達の学力は飛躍的な伸びを見せ始めた。

西洋文明の使者

当時、学問を志す若物達の大部分は政界に進出する事を生涯の目的と考えていた。熊本洋学校の生徒達も例外ではなく、将来は参議(公)の大臣に当る(公)になると公言する者も少なくなかった。

こうした若者達に対しジェーンズは、国家に隆盛をもたらす根本は殖産興業以外にはないと説いた。資源を開発し、貿易を進めてこそ国家は発展する。政治などはその上での枝葉に過ぎない。特に日本においては農業、鉱業、土木、造船、機械工業を推進すべきであり、そのためにこそ、智を磨き、徳を積まなければならないのだ。彼の言葉によって、首相、参議を夢見ていた若者達の心は、しだいにさまざまな方向へと向い始めたのである。

近代日本の揺籃期という激動の中にあつて、熊本洋学校はわずか五年でその幕を閉じた。

しかし、この場所から後に『国民の友』を創刊した言論人・徳富蘇峰をはじめ、牧師、思想家、教育者、学者、医師、実業家、外交官など多くの人材が巣立って行った。また、アメリカ式の農業や食生活、印刷機などジェーンズによって持たされたものは少なくない。彼は明治期における熊本の諸産業のほとんどすべてに、何らかの影響を及ぼしたと言っても過言ではないだろう。

まさにジェーンズは、熊本にやって来た「近代」そのものだったのである。

●参考文献／熊本バンド物語(三井久)



ジェーンズのために建築された洋学校教師館(ジェーンズ邸)